

雨立日観測室

た
あ
ゆ
ら

雨が降っても、キリは以前みたいには騒がなくなった。

開け放たれた窓の傍の、小さな木の椅子。キリは、そこにちょこんと腰掛けている。いつになく真剣な横顔をして、じっと窓の外を見つめている。跳ねた雨粒を浴びても気にも留めない。室内の電灯に照らされて、水滴を帯びた長い髪がさらさらと光る。キリは振り返りもしない。雨の日がやって来る度に物珍しがってはしゃいで、観測員たちの邪魔をしていたのが、つい数ヶ月前のこととは思えなかった。

窓には、外へと張り出した板がしつらえてある。大小さまざまなガラスの容器が二十二個、並んでいる。勢いを増してきた雨がガラスを叩いていた。断続的な澄んだ音。聴こえないほど小さな、小さな雨音。高かったり、低かったり、硬かったり、柔らかかったり。——キリは耳を澄まして聴いている。

とつ、たつ、ぴとん。

ぼつ、たん、ぼつん。

たつ、とつ、ぱたん。

たん、ぼつ、たとん。

「ねえ」

不意にキリが言った。

「なんだい」

そう答えたのは観測員のひとり、ツイリだった。床の上に座っている彼は、膝の上にスケッチブックを置いている。黒鉛で、雨を眺めるキリ、窓の外、降る雨、——雨音のする風景を描き取っている。

「雨の音、ぽと、ぼつ、って聴こえるんだけど」

キリは、真上に視線を向けた。天井を指して言う。

「天井からは、ぱらららっ、っていう具合に聴こえるよ」

ん？ と首を傾げて、ツイリは天井を見た。キリの指先の延長線を辿って、もう一度、ん？ と首を傾げる。

「どうして違う音がするの？」

「……ああ、そういうことか」

ツイリはうんとうなずいて、スケッチブックを脇へと置いた。立ち上がる。キリの頭上を越えて、窓の外へと顔を突き出す。

「外を降る雨の音は、どういうふうに聴こえる？」

キリはツイリの真似をするみたいに窓の外を覗いて、少し、考え込むようにする。

「ざざー……って聴こえる」

「僕たちが観測する雨音って言うのはね、キリ、雨の音のことじゃないんだ」

不思議そうに首を傾げたキリに、ツイリは笑う。

「ガラスに跳ねる雨の音は、雨が鳴らしたガラスの音色。天井から聞こえているのは、雨粒が屋根を叩いて鳴らしている音さ」

「音楽の演奏家みたいね」

「その通り。だから、外から聴こえる雨の音は、そういったガラスや屋根や、芝生や敷石、木の葉々、水たまりや、外に行く人たちの傘を、雨粒が叩いて鳴らす音全部の入り混じった音楽なんだ。今日という雨の日の音楽だ」

いつの間にか、ほとんどのガラス容器からは雨水が溢れていた。

雨が水面を叩く音。

キリが、ひとつひとつ引っ繰り返して容器を空にしていくと、また、透き透ったガラスのかすかな音が聴こえ始めた。

「だから、雨の日の時間をつくっている音や風景ぜんぶを、僕たち観測員は雨音って呼んでいるわけだ」

「ふうん」

短くうなずいて、キリは、今度は遠く、窓の外の風景に目を遣った。ざざ、と、ノイズのようにも聴こえる雨の音。けれどじっと耳を澄ませば、その中からは色々な、たくさんの音が聴こえてくる。

そっと、キリは目を閉じた。

「そういうふうになると確かに、雨音を聴いていると、自分が雨の音に紛れてしまいそうな気分になるよ」

ゆっくりと息を吸って、吐いた。

雨の日の匂い。

雨の日のリズム。

冴えた感覚が雨音と触れている。

「雨粒を浴びなくても、降る雨の音が身体に響いてる。——わたしも、今日という雨の日の雨音なのね」

そう言って、嬉しそうに。

雨の降らない世界からやって来た少女は微笑んだ。